

# 「どちらが…？」複数テキストを 読み比べて、読みを深める

～第4学年国語

『ごんぎつね』の実践を通して～

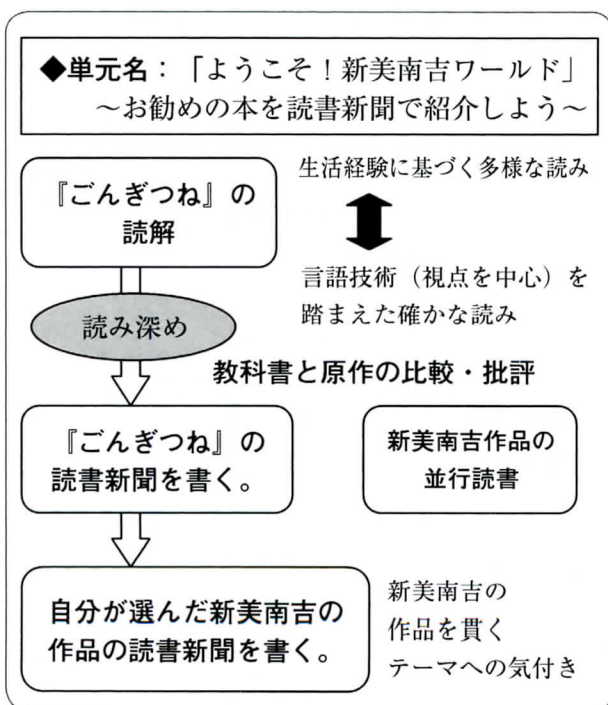


五泉市立村松小学校 教諭 奥山 順一

## 1 はじめに

OECDの国際学習到達度調査（PISA）では、書かれた情報を自らの知識や経験に位置付け、理解・評価する「熟考・評価」の読解力が重視されている。

私は、教科書の内容をただ理解させるだけでなく、複数の教材を読み比べ、それをどう受け止めるのか価値批評させることで、児童に自分のこれまでの読みをもう一度振り返らせ、深い読みを促すことができると考えた。そこで、本単元では、以下のような構想で実践を行った。



## 2 授業の実際

- (1) 教科書と原作の文章を比較し、読みを深める
- 教科書の『ごんぎつね』を読解した後、新美南吉の草稿『権狐』（以下：原作）を提示した。児童は、教科書と『権狐』を読み比べ、様々な表記や表現の違いに気付いた。その中でも、児童が最も大きく異なると指摘したのは、兵十に撃たれた後のごんの姿が書かれている次の箇所である。

【教科書】…ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

【原作】…権狐は、ぐつたりなつたまゝ、うれしくなりました。

発問：兵十に撃たれた後の、「ごん」の姿の書かれ方は教科書と原作で、どちらがあなたの読みに合っていますか。

### 【個人思考】

ごんの気持ちを兵十にも分かってほしい。「うれしい」と書いてあった方（原作）が、ごんの気持ちがよく分かると思う。



撃たれたのに「うれしい」はおかしな感じがするな。

### 【考えの交流】〈グループ→全体〉

「うれしい」と書いてある方（原作）が、ごんの気持ちが読者によく伝わるよね。



でも、兵十には、ごんの「うれしい」は伝わったのかな？

「うれしくなりました」は、ごんの気持ちが分かりやすいという考えと、「うれしい」は心の中を表すので、兵十に気持ちを伝えられないという考えが出された。

「うれしく」なったごんの心の中を、兵十はわからないよ。「うなづく」動作であれば、兵十にもごんの思いが分かってもらえる…。



気持ちを直接書くよりも、行動が書かれている方が気持ちが伝わるのかも…。

発問：どうして教科書は、「うなづく」の方にしているのかな？



「うなづく」で、ごんの思いが兵十に届いたことを、はっきりさせたかったと思う。

ごんには、「うれしい」だけではなく、殺されることでしか分かり合えず、「残念」や「悲しい」という気持ちもあったんじゃないかな。

「うなづきました」に、ごんの複雑な思いが込められているという気づきが生まれた。また、兵十にごんの思いが伝わり、ごんぎつねの話が兵十から村人へと語り継がれたという伝承性に着目した児童もいた。

児童は、どちらが自分の読みにより適しているのかを友達に納得してもらおうと、単元の学習に入って書き続けてきた自らの「ごん日記」や「兵十日記」、そして教科書の叙述を再度読み返し、考えの根拠を探った。このような過程を通して、『ごんぎつね』の作品を一層読み深めることができた。

### (2) 読書新聞に自分の読みを表現する

『ごんぎつね』の読解を終え、児童は作品を紹介する読書新聞を書いた。登場人物の「ごん」と「兵十」の人物像を紹介したり、その関係がどう変化したかを図示したりする内容が多く見られた。また、最終場面で視点が「兵十」に転換されることで、物語の悲劇性が一層高まるのではと、作者による視点の工夫に気付いた記述もあった。

単元末には、新美南吉の他作品を紹介する読書新聞を書いた。そこでは、『ごんぎつね』の学習を基に、物語の設定や人物像を簡潔にまとめたり、作品と『ごんぎつね』との類似点にふれ、「別の世界を生きる者たちの心の通い合い」といった新美南吉の作品のテーマに言及したりする児童の姿も見られた。ここでは、『ごんぎつね』で読み比べをした学習経験が生かされていたと考える。

### 3 おわりに

複数の教材を読み比べ、自分の読みにどちらがふさわしいのかを批評することで、児童の読みが深まった。また、友達の読みを聞くことで、読みの多様性や学級集団で読みを交流する意義や楽しさも実感することができたと思う。

今後も、児童が作品世界を豊かにイメージし、読みを一層深められるよう、日々の実践を積み重ね、授業改善に取り組んでいきたい。

